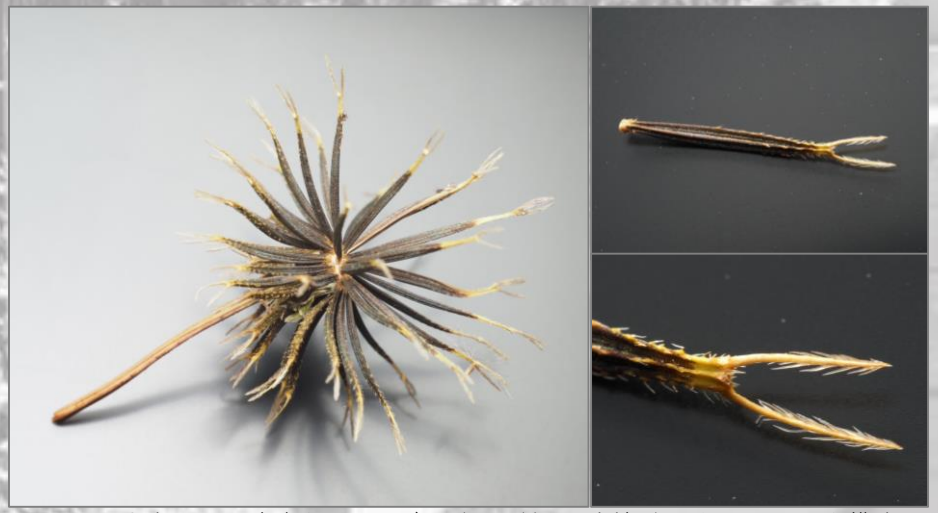
科技高 いきもの記

Vol.16 2020.11.30

佐藤龍平

ひっついて生息地拡大中
コセンダングサ



↑“ひっつき虫“として有名なコセンダングサの種子。先端が”かえし”のついた構造になっていて、動物の毛や衣服にくっつくとなかなか取れない。

↑咲き始め。外側から咲く。

↑満開の状態

↑外側から順に種子ができる

↑花の断面。細長い筒状花がたくさん集まっている。

↑一つの花だけ分離してみた。中央のカールした部分がめしべ。

今年は１１月になっても春のように暖かい陽気が続いていたが、ここ最近はいよいよ寒さが身に染みるようになってきた。季節は確実に移り変わっていて、植物は着々と寒い冬に向けて準備を始めている。この時期に草むらに入ったことがある人ならば、からだ中が“ひっつき虫“だらけになって、ひっぺがすのに大変な思いをしたことがあるだろう。先日、生徒と学校周辺を散策した時に、ズボンがひっつき虫だらけになっていて笑ってしまった。

”ひっつき虫”というのはご存じの通り“虫”ではなく、植物の“タネ”だ。色々な植物が作る、服にくっつくタイプのタネを総称して“ひっつき虫”と呼んでいる。校庭周辺の至る所に生えている**「コセンダングサ」**という植物のタネは”ひっつき虫”の代表格だ。コセンダングサは動物のからだにタネをくっつけて運んでもらう戦略を手に入れたおかげで、自分の生息範囲を拡大させてきた。

↑制服がひっつき虫まみれ

（こういう種子は**動物散布型種子**と呼ぶ。）その効果は絶大のようで、もとは熱帯アメリカ原産であったコセンダングサは、江戸時代に日本に侵入してから日本全国に生息を拡大し、今では**要注意外来生物に指定されている。**つい先日、生徒から「先生、種子散布に協力しちゃってますよ。」と言われ、何のことかと思ったら、頭にコセンダングサのタネがくっついていた。校庭でハナアブの幼虫を観察しているときについてしまったらしい。まんまとコセンダングサの戦略にしてやられたわけだ…。日本の生態系にとっては大迷惑な話だが、生物の進化という観点で見れば、実にうまく適応してきたと言わざるを得ない。

コセンダングサを観察してみると、タネはタンポポの綿毛のように放射状にたくさんくっついている。１つ取り出してよく見ると、タネの先端は二又あるいは三又に分かれていて、**釣り針のような“かえし”がついている**のが分かる。この“かえし”構造のおかげで（せいで）一度服にくっつくとなかなか取れないわけだ。タネが作られる前、つまり花が咲いているときのコセンダングサも観察してみた。コセンダングサの花は、黄色い小さな花で、よーく見てみると筒状の細長い花が集合していることが分かる。その細長い花の１つ１つが受粉して種子をつくると、あの細長いひっつき虫になるというわけだ。

ところで、種子がくっつくという戦略以外にも、コセンダングサには日本の在来種にとって非常に厄介な性質がある。コセンダングサの根から、**他の植物の成長を阻害してしまう物質が分泌されている**のだ。このような作用は**アレロパシー**（allelopathy 他感作用）と呼ばれていて、同じく外来種のセイタカアワダチソウなどでも確認されている。タネは動物にひっついて運んでもらい、新天地では他の植物の邪魔をする…うーん、実に厄介な植物である。